

「青葉酒」
あおば しゅ

酒を口にしてしていると、ふと懐かしい気持ちになることがある。ずっと忘れていた思い出が不意によみがえってきたり、過ぎ去った時間を感じて切なさが押し寄せてきたり――。

おれは居酒屋を出ると、夜風を受けて現実世界へと引き戻された。

酔いで忘れかけていたことが頭をちらつく。理不尽な上司の心ない一言。いずれ笑えるときが来るんだろうなあと思いつつも、いまのおれは時間が解決してくれるのを待つしかない。

もやもやした思いを抱えながら、夜の街を歩いていた。

もう一軒くらい寄ってから帰るか……。そう思って店を探していたときだった。路地を少し入ったところに、気になる看板を掲げた店を見つけた。

「Bar 青葉風……」

その字面から、おれはなんだか涼やかなものを
からだ
身体に感じた。

青葉風。青々と茂った初夏の葉を吹き抜けてい
く風。

まさしく、いまの自分に吹きこんできてほしい
ものだと思いながら、おれはその店に足を踏み入
れることにした。

扉を開くと、途端に爽やかな風が鼻腔をすり抜
けていった。ふっと甘酸っぱい気持ちになって、
あたりを見回す。

「いらっしゃいませ。こちらのお席に」

脚長のグラスを拭きながら、バーテンダーはに
こやかに言った。

促され、おれは餡色のカウンターの一席に腰か
けた。

「お決まりになりましたら、お声がけください」
バーテンダーからメニューを受け取る。

店に入った瞬間から、おれはなぜだか懐かしい
気持ちに包まれていた。それは、久しく忘れてい
た瑞々しい感覚でもあった。吹き抜ける風を胸い

っばいに吸いこんで、漠然とした未来への希望を感じていたころの記憶。そんなものが湧きあがってくる思いにとらわれたのだった。

「すみません、この、青葉なんとか、というのは何ですか？」

おれはビールやハイボール、カクテルなどの名前の中に、変わったものを見つけて尋ねた。

「青葉酒ですね」

「あおばしゅ？」

「ええ、うちのバーでお出ししている特別なお酒です」

「へえ、特別な……」

その響きに、思わず好奇心をくすぐられた。

「じゃあ、このお酒でお願いします」

「かしこまりました」

離れていったバーテンダーの背中を見送ると、おれはほかの客に目をやった。

カウンターだけの店内には、まばらに人が入っている。その誰だれもが目を閉じて、自分の世界に入りこんでいるようだ。酒の味を楽しんでいるのか、

酔い心地に浸ひたっているのか、はたまた何かに思いを馳はせているのか……。

「お待たせしました、青葉酒です」

差し込まれたグラスを見て、おれは声をあげそうになった。

目の覚めるような、鮮やかなブルーグリーン。

まさしく生命力に満ち満ちた青葉のような色合いに、感嘆の息をもらした。

グラスを持って口元に運ぶ。唇が触れ、グラスを徐々に傾ける。

液体が口に入ってきたかと思った瞬間だった。

身体の中を、爽やかな一陣の風がさあっと吹き抜けていった。

「これは……」

戸惑うおれに、バーテンダーは楽しげに言った。

「いかがでしょう、青葉酒のお味のほどは」

おれはもう一口、慎重にそれを口に含んだ。

やはり心地よい風にさらされたような気分になつて、呆然ぼうぜんとするばかりだった。

「青葉酒は、その名の通り青葉からつくるお酒で

してね」

バーテンダーは口を開いた。

「初夏に茂る青葉を実際に摘つんできて、それをアルコールに漬けてつくったものなんです。昔、店を出すにあたっていろんな場所の青葉で試作品をつくってみたんですが、最後にこれだと辿たりついたのが、ある場所で採れる青葉でした」

「ある場所……?」

「高校です」

彼はつづける。

「青春の象徴である高校。その校庭に茂る青葉には、ほかの場所にはない特徴があることが分かったんです。あの濁にごりない無垢むくな高校生たちのエネルギーを存分に吸いこむからでしょう。そこで採れる青葉でつくったお酒は、柑橘類かんきつるいよりもフレッシュな独特の風味を持つものに仕上がるんです。

さらにその中でも、雨上がりの青葉からつくるお酒が極上でしてね。底抜けの青空に、いつにも増して輝く緑。吹き抜ける瑞々しい風。弾はじけんばかりの高校生たちの活力。そんな青葉にまつわる

すべてのものが凝縮されるのが、雨上がりのそれなんです。

私は毎年、高校に出入りしている庭師の方から質の良い青葉を仕入れています。そしてその青葉で漬けたお酒を、こうしてお出ししているというわけなんです」

なるほど、と、おれは驚きながらも感心した。

「世の中には、こんなものが存在していたんですねえ……」

もう一口、酒を少し啜すすってみる。

おれは舌鼓したつづみを打ちながら、感じるままに身を委ゆだねる。

アルコールは飲むと身体が火照ほってきて、熱いものが全身を巡りはじめるものだ。けれどこの青葉酒は、それとはちがって心地よい涼しさが隅々すみずみまで行き渡るような感覚になる。そして、何だっでできてしまいそうな、若々しい衝動がふつつつと湧きあがってくるのだ。

「もう一杯、お願いします」

グラスを重ねるたびに、若返っていくような錯

覚にも陥った。そして酔いが深まるにつれて、昔のことが鮮明に思いだされてきた。

母校のE高を卒業したのは、もう十年も前に
遡さかのぼる。

当時の自分は、日々膨ぼうだい大な宿題に追われながら、部活に遊びに恋愛に全力で打ちこんでいたなあと思いだす。

高校に進学すると、いろんなカルチャーショットが待ち受けていた。

中学までとは比較にならないスピードで猛烈に進んでいく授業。部活の先輩せんぱいとの上下関係。友達の高校デビュー。急に大人びていく女子たち。

早弁というのを初めて見たのも、高校に入ってからだった。二限目が終わるころには弁当をすっかり平らげてしまっている野球部のやつ。授業中にこっそりおにぎりを頬張ほおばって、先生に怒られていたバレエ部の友達。

昼休みを告げるチャイムが鳴り響くと、号砲を聞いたような勢いで生徒たちが一斉に教室から飛びだしていく。購買部で一番人気の焼きそばパン

を手に入れるためだ。焼きそばパンは一人三つまで買えるので、おれはよく友達に自分の分もと頼んでいた。

そんな競争があったから、ときどき授業が長引いたりすると、廊下を走っていく他のクラスの生徒たちを妬ねたましい目でみんな見ていたものだった。遅れをとると、目当てのものは売り切れる。そんなときは購買部に押し寄せた大群衆の中を巧みに縫って、残り物から即決で良いものを選びとる技術が必要になる。ラグビー部のやつが得意だったなあと、友達の顔が浮かんでくる。

恋愛沙汰ざたでも、いろいろあった。あいつがあいつを好きらしい。付き合ってるのは誰と誰だ。あのころは、そんな話題で持ち切りだった。男子たちは人気の女子といかに話すかで競いあって、ちよつとでも雑談できたりすると優越感に浸ったものだ。

ふと、当時の彼女の顔が頭をよぎった。一つ下の学年だった彼女とは、仲良くしつつもよく喧嘩けんかした。その原因のほとんどが嫉妬心しつとしんだったんだか

ら、自分も若かったんだなあと苦笑する。

でも、楽しいこともたくさんあった。屋上につづく階段での逢瀬^{おうせ}。部活帰りの神社での他愛もない会話。一緒に行った地元の祭り。

おれはなんだか、固まってしまっていた絵具が水を得て、一斉に色を取り戻したかのような気持ちになつていた。十年も前の出来事が、ついさっきのことのように思えてくる。

あのころは、こんなにも生き生きとしていたんだなあ。

いま自分は、十代の自分と重なっているのだ――。

はっと気がつくとき、思い出に耽^{ふけ}るあまり空のグラスを呷^{あお}っていた。

途端に恥ずかしくなつて、慌ててグラスをコースターの上に戻した。

「ははは、大丈夫ですよ。青葉酒をたくさん飲むと、みなさん同じようになりますから」

内心を見透かしたようにバーテンダーは笑い、

囁^{ささや}いた。

「ほら、ああやって」

言われておれは、ほかの客に目をやった。

さっきと同じく、みながみな、自分の世界にすっかり入りこんでいた。でも、それは酒に酔ったことだけではなかったのだと理解した。いままさに、それぞれがそれぞれの青春時代にタイムスリップしているのだ。

「この青葉酒は、爽やかな気持ちになるだけではありません。時のフィルターで濾こされるうちに色褪あせてしまった高校時代の思い出に新鮮な風を送りこんで、もう一度、息吹いぶきを取り戻させることができるんですよ。

ただ、ときに忘れていた失敗談や恨みつらみなんかまでも鮮明に思いだしてしまうこともありましてね。だから、お客さまの中には恥はずかしさや怒りで顔を赤くされる方もいらっしやいます。まあ、いずれにしてもお酒で赤くなっているの区別はつきにくいんですが」

バーテンダーは微笑ほほえんだ。

おれも一緒になって笑ったあと、何度目かの

台詞^{せりふ}を口にした。

「すみません、もう一杯、お願いできますか？」

「もちろんです」

おれは再び遠い過去の世界に戻っていく。

同じテニス部だったやつらの顔が浮かんでくる。声を掛けると返事がかえってきそうなほど、リアルに、鮮明に。

「昔のことをよみがえらせてくれるお酒かあ……」

ひと通り楽しんでから目を開けて、おれは改めて^{つぶや}呟いた。

そして自分の内に、ある願望が湧きあがってきていることに気がついた。

「ねえ、バーテンダーさん」

青葉酒を楽しむうちに、おれはこんなことを思いはじめていたのだった。

「なんだか、逆のお酒も飲んでみたくなってききましたよ」

「逆、と言いますと？」

「いえ、昔の思い出に浸るうちに、複雑な気持ち

になつてきまして……」

バーテンダーは、こちらが話したすのを待って
くれる。

躊躇ためらい一つも、おれは言った。

「自分の話で恐縮ですが、近ごろずっと、苦手な
上司からの理不尽な一言にすっかり打ちのめされ
ていまして……きつと、いつかは笑い飛ばせる日
がくるんでしょうけど、まだそんな心境には至っ
ていません。だから、昔の思い出をいまのこの
ように思いだせるお酒があるのなら、いまのこの
もやもやを、早く過去の思い出にしてくれるお酒
があればいいなあと思つたんですよ」

我ながら、ずいぶん都合のいい話をしているな
と、口にしてから後悔した。そんな自分が急に恥
ずかしくなつてきて、目を伏せた。

「すみません、いまのは忘れてください」

そう言おうとしたときだった。

バーテンダーが何やらごそごそしはじめ、や
がて目の前に、すつとグラスが差しだされた。

「こんなお酒は、いかがでしょう？」

注がれていたのは半透明の茶色い液体だった。

「これは……」

「落葉でつくった、落葉酒です」

言葉を失っているおれに向かって、彼はつづける。

「じつは、青葉酒を研究するうちに、ほかの葉っぱでお酒を漬けるとどうなるのか、試してみたんですよ。すると、落葉で漬けたお酒には、また別な作用があることが分かりましてね」

グラスからは、濃厚な香りが漂ってくる。

「これを飲むと時間感覚がずれてきて、いまという時の出来事も、一気に遠い過去―懐かしい青春時代のことのように思えてくるんです。おまけに嫌なことは美化されて、酒の肴さかなにうってつけの良いい思ひ出に変わります。酔いが覚めても効果は持続しますしね」

「そんなお酒が……」

おれは身を乗りだした。

「生きていると嫌なことは数限りなくあるものです。それを軽くして差しあげるのも、うちのよう

な店の役割ではないかと、私は思っています。思
い出とうまく付き合うことのできる店。それが、
うちのコンセプトなんです」

もはや唸^{うな}ることしかできなかつた。

バーテンダーは、酒を勧めながら言う。

「さあ、このお酒で、どうぞいまを過去に変えて
しまってください」

グラスに手を伸ばそうとしたおれに、ただし、
と彼はこう付け加えた。

「落葉酒の影響で、ときどき妙なことが起こるの
だけはご了承くださいね」

「妙なこと……?」

「混線すると言いますか、いまが過去と混ざるの
で、あとで青葉酒を呷ったときに起こり得ること
なんですが」

「いったい何が……」

おれは出しかけていた手を引っこめた。

バーテンダーはいたずらっぽく笑って言った。

「青葉酒で思いだした同級生の輪の中に、上司の
方が制服姿で紛^{まぎ}れていたたり、ですとかね」 (了)